

# 職員のひとりごと (HP 版)

No. 3 2020・2・21 (文責 渡辺 和明)



## 「NO！」つまり「いや！」を認める視点、立場・・・

「NO！を認める」とは・・・あらためて、障がいを持った方々と付き合う上での私自身の思いを。私が特別支援学校の教員になって最初に衝撃を受けた特別支援教育の先輩を招いての研修から。

障がい者福祉が進み、人権意識の高い北欧では、障がい者の人権を守ることの第一歩が「NO(ノー)」つまり「いや！」という否定語を認めることだそうです。

重い障がいを持った方々の意思表示は難しいです。

でも「NO、いや」という表現は出しやすい。声を出し、首を振る等々・・・幾つもの選択肢を示す中で、「NO」という表現が無くなった時が初めて「YES」である。

そうやって、彼らの「YES、はい」を引き出すことが「支援の鍵」である・・・

「NO を認めることは人権保障の第一歩である」、考えさせられました・・・



NHK スタジオパークにて

日本では「NO」つまり「いや」という表現が嫌われます。「はい」つまり「YES」を重んじる社会風土があり、社会性や協調性を重んじ、周りに合わせる事が美德とされる文化です。日本人が「個」よりも「集団」を大事にすること、それは日本の良さでもありますが、反面、日本人は「人権意識が薄い」という課題にもなり、それは様々な「差別の芽」にもつながるのが怖い面にも感じます。

「NO」を認めることは、私自身にも大きなハードルでした。実際の活動場面では、否応なく、指示に従わせたり、集団に合わせてたりしてしまうことも多くしてきました。頭では理解できても、いろんな子どもたちの「NO」を受け止めることは、そう簡単ではありません。

それでも障がいを持つ方々と触れあう人間は、常に「NO」を認める意識は持つべきだと思います。

話は飛びますが、だいぶ前になりますが、茨城の特別支援学校の先輩教員から学んだ話。

その特別支援学校の高等部の作業学習では、「農園芸班」「木工班」等の作業グループの中に「何もしない班」というグループを作ったそうです。形は違いますが、「NO、やらない」を認めた実例です。「やらない」という生徒の発信に対し「わかった、なんにもしないでいよう」と教員が認め、一緒になって暇な時間を費やすと、生徒の方から「明日はやる」と言い出すようです。強制されるのは嫌だけれど、何もしないのは退屈だし、つまらなさを実感し、働く楽しさを逆に学ぶようです。

「北風と太陽」の話ではありませんが、着ているコートを脱がすには強制的な「風」ではなく、暖かな「太陽」だという話を思い出します。論点がずれるかもしれませんが、参考までに。

さて、障がいを持つ子どもたちを理解する上で、この子たちは「できない」のではなく「どうしたらよいか分からず困っている」のだという視点が大切だと言います。「どうしたら良いか分からない子」を前に、ついついこちらのペースで働きかけを繰り返す中で、本当は「違う」「分からない」「いやだ」と困った末の表現が、実は泣いたり暴れたりする行動に表れてくることもあるでしょう。

つまり「心の中のNO!」という声、表現なのかもしれません。

「NO」を認める、いつになっても高いハードルですが、常に戒めにしたいと思います。

元淵江公演「光の祭典」

